

## 霊的戦いにおいて健全なクリスチャンの攻勢を維持すること

([第一ペテロ 1 章 13 節](#))

ペテロ・シリーズ#29

ロバート・D・ルギンビル博士著

第一ペテロ 1 章 13 節

だから、霊的に成熟した目覚めた心をもって、あなたがたの思いを引き締め、備えを整えなさい。そして、イエス・キリストが現される時にあなたがたにもたらされる恵みに、あなたがたの望みをしっかりと置きなさい。(第一ペテロ 1 章 13 節)

**だから (Therefore):** ここでペテロが、より一般的なギリシア語の接続詞ではなく *διο* ( $\delta\iota\omicron$ ) を用いていることは、13 節をその直前の内容と非常に密接に結び付けています。私たちが、冷静で霊的に成熟した心をもって、自分の思いを引き締め、「来たるべきこと」に思いを集中させるべき理由は、そのような正しく考える姿勢と将来を見据える姿勢こそが、イエス・キリストを信じる者として私たちに与えられている祝福を認識した結果としてふさわしいあり方だからです。そして、私たちはまさにイエス・キリストを信じる者です。それこそが、私たちの本当の姿です。しかし、この世は「騒がしい」場所であり、気を散らすものに満ちています。その多くは、この世で生きていけば避けられないものですが、その一方で、多くのものは、悪い者が自分の支配体制の一部として意図的に用意したものであり、信者を道から迷わせるため、あるいは少なくとも私たちの力を奪い、前進を妨げるためのものです。私たちには、私たちのために死んでくださった天におられる主、すなわち、私たちが心から愛していると告白しているイエス・キリストがおられます。その一方で、御使いたちは、こうした真理が私たちにどのような影響を与えているかを見守っています。私たちは、この偉大な救いに本当に感謝している者として、また、本当にこの世以上にイエスを愛している者として生きているのでしょうか。聖書が永遠について教えていることを学び、その真理、またそれ以外の真理を、この人生の苦しみや試練に適用することに熟達し、さらに、そのように実践し続けるために絶えず目を覚ましていることは、霊的戦いに勝利するための重要な要素です。そうすることによって、私たちは、今述べた問いに対して、熱意をもって「はい！」と答えることができるのです。

**霊的に成熟した目覚めた心をもって、あなたがたの思いを整えなさい (Gird up the loins of your mind in spiritually mature alertness):** 使徒ペテロが聖霊に導かれて与えたこの命令について、まず注目すべきことは、それが内面から外へ向かって積極

的に行動することを求めている点です。ペテロは、私たち生まれ変わったクリスチャンが与えられている(そして将来十分に味わうことになる)救いのすばらしさを思い起こさせた後、その結果として、この世で私たちがどのように生きるべきかを語り始めます。しかし彼は、まず「あれをしなさい」「これはしてはいけません」といった律法主義的な行動規則の一覧を示すことから始めてはいません。むしろペテロは、イエス・キリストと共に歩む土台として、自分の考え方そのものを正すよう勧めています。自分の最も深い思いを一貫してクリスチャンらしいあり方へと導き、行うすべてのことにおいて真理を心に留め続けることは、霊的に未熟な状態でできることではないのは明らかです。したがって、この命令に忠実に従うためには、信者は霊的に成長し、霊的に成熟した後もなお、神の御言葉の教えに注意を払い続けなければなりません。生まれながらの人間の思いは、神の観点を受け入れることに極めて強く抵抗します。神の御言葉の真理によって絶えず、しかも継続的に「思いを書き換えられ」、その真理によって肉体的な思いを訓練することによってのみ、信者は霊的な意味で本当に「行動の備えができた」状態になることができます。アブラハム、ダビデ、ダニエルをはじめ、私たちが聖書の中で敬愛するすべての信者たちが霊的勝利を収めたのは、勝利の瞬間に信仰を働かせただけではありません。彼らは、真理を信じ続け、その真理が自分自身の存在そのものに完全に溶け込むまで忠実であり続けました。そして、特に困難に直面した時には、その真理を心の最も深い思いや黙想のすべてに一貫して適用したのです(詩篇1篇2節)。

ですから、真理を帯として腰に締め、義の胸当てを着けて、しっかり立ちなさい。(エペソ6章14節)

パウロも、ここで「帯を締める」という意味に同じ基本的なギリシヤ語動詞(接頭辞だけが異なります)を用いています。これは、「身支度を整える」とは、本質的には腰に帯を締めて衣服を整え、まとめ、しっかり固定することであるという、ギリシヤ人に共通した考え方を表すためです。したがって、霊的な意味では、「帯を締める」とは、何の備えもできていない状態ではなく、行動できるよう備えを整えることを意味します。それは、一日の支度をするためにまだ起き上がりもせず、着替えも済ませていない人とは対照的です。ですから、「目を覚ましていること」や「目を覚まして警戒していること」が、聖書の中で同じ考えを表す命令として用いられているのも不思議ではありません。すなわち、神の御言葉の真理を聞き、学び、信じ、黙想することによってもたらされる霊的成長を通して、心の内を霊的に整えるということです(マタイ24章42-43節;25章1-13節;26章41節;マルコ13章33-37節;14章38節;ルカ12章35-37節;21章36節;22章40節;22章46節;使徒20章31節;第一コリント16章13節;エペソ5章14節;6章18節;コロサイ4章2節;第一テサロニケ5章6節;第一ペテロ4章7節;5章8

節;黙示録 3 章 2 節;16 章 15 節)。この命令に従わないこと——しかも、この命令は、真理を一貫して求め、それを心に大切に蓄えてきた者だけが実行できる命令ですが——は、主が私たちに送られる出来事に対して備えができていないことを意味します。そして、試練の時が来ると、「裸」で「眠っている」者として見いだされることになるのです。

「見よ。わたし(すなわち、私たちの主イエス)は盗人のように来る。目を覚ましていて、自分の衣を守る者は幸いである。裸で歩いて、人々に自分の恥を見られずに済むからである。」([黙示録 16 章 15 節](#))

したがって、「私たちの思いの腰」とは、私たちの心の内なる働きのことです。そこは、肉体の思いと人間の霊とが交わる場所であり、私たちが考え、感じ、思い巡らし、心の奥深くで「私たち自身」である場所です。ですから、内なる人を整えるためには、救われる以前から受け継いできた古い考え方を根本から作り変えなければなりません。たとえ救われて長い年月がたっていたとしても、この世のあらゆることに対する考え方を築き直し、改革していくこの過程は、御国が来る時まで決して終わることはありません。この世、その価値観、そしてその圧力は絶えず私たちを取り巻いています。ですから、私たちの「神の観点」は常に試され続けており、この点で成長する余地はいつもあります。しかし悲しいことに、現在のラオデキヤ時代の教会に属するクリスチャンの大多数にとって、この「成長する余地」は非常に大きなものとなっています。なぜなら、今日では真の霊的成長がほとんど見られず、それは、御言葉の真理が十分な深さをもって教えられることがほとんどないからです。

「見よ。その日が来る。——主なる神のことば。——その時、わたしはこの地に飢饉を送る。それはパンの飢饉でもなく、水の渇きでもない。主のことばを聞くことの[欠乏]である。[人々]は海から海へとよろめき歩き、北から東へさまよいながら主のことばを求めるが、それを見いだすことはできない。」([アモス 8 章 11 節](#))

救われる時、私たちは新しい、きよめられた心を与えられます([エゼキエル 36 章 26 節](#); [へブル 10 章 22 節](#))。また、ヨハネが述べているように、新しい「心構え」あるいは「考え方」も与えられます([第一ヨハネ 5 章 20 節](#))。そして、聖霊の働きによって、すべての信者は新しく生まれる時、真理に対して初めて目が開かれ、この世の本当の姿を知ることによって、この新しい見方の喜びを経験します。私たちは以前は盲目でした

が、今は見えるようになったのです([ヨハネ 9 章 25 節, 39 節](#))。<sup>1</sup> しかし、この最初の霊的な目覚めだけでは、信者が最後まで無事に歩み続けることはできません。私たちの新しく生まれた心は、真理によって絶えず養われなければなりません。そして私たちは、その真理を信じ、それを心の宝としなければなりません。そうして初めて、この救いの視点は成長し、しぼんでしまうことがないのです。

そして私たちは知っている。神の子は来られ、私たちに真理を知るための心(すなわち、内面的な認識の変化)を与えてくださった。そして私たちは、その真理であるお方、すなわち神の子イエス・キリストのうちにいる(すなわち、目には見えない立場上の変化)。この方こそ、まことの神であり、永遠のいのちである。  
([第一ヨハネ 5 章 20 節](#))

私たちは以前、「美德思考(virtue thinking)」<sup>2</sup> や、新しく生まれた後、霊的成長と前進、そして真理を適用する過程を通して、自分の考え方を神の真理に合わせて方向転換していく方法について学びました。<sup>3</sup> ここで重要なのは、十分な真理を学び、それを信じることによって自分自身のものとし、聖霊が用いることのできるものとした後であっても、さらに一步進んで、繰り返し「自分の[思いの]腰に帯を締める」必要があるということです。真理を思い起こし、心に留め、具体的にも一般的な原則としても適用するこの過程は、霊的成長が進むにつれて、ある程度は自然に行われるようになります。しかし、それでも私たちは、思いがけず困難な時が襲ってきたなら([伝道者 9 章 12 節](#))、ダビデがそうしたように(たとえば[サムエル記上 30 章 6 節](#))、いつでも「主によって自分自身を励ます」備えができていなければなりません。

(4) いつも主にあって喜べ。もう一度言う。喜びなさい。(5) あなたがたの寛容をすべての人に知らせなさい。主は近い。(6) 何も思い煩ってはならない。ただ、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願いを神に知っていただきなさい。(7) そうすれば、あらゆる理解を超える神の平安が、キリスト・イエスにあって、あなたがたの心と思いを守るであろう。(8) 最後に、兄弟たちよ、あなたがたが前進していくにあたり、真実なこと、敬虔なこと、正しいこと、聖いこと、[神に]喜ばれること、尊ぶべきこと、もし何か[クリスチャ

---

<sup>1</sup> 本研究で取り上げた霊的戦いの実践方法において、聖霊が果たしておられる極めて重要な役割については、[『聖書の基礎 第5部「聖霊論\(Pneumatology\)」』II.B.3.b「信者に力を与える働き\(Empowering the Believer\)」](#)をご参照ください。

<sup>2</sup> ペテロ・シリーズの[#16](#)と[#17](#)をご参照下さい。

<sup>3</sup> [『聖書の基礎 第4B部「救済論\(Soteriology\)」』II.7.c「新しく生まれた信者としての私たちの新しい生き方」](#)をご参照ください。

ンとしての歩みの中で培われた]徳があり、もし何か[さばきの時に神から受け  
る]称賛に値することがあるなら、そのような[あなたがたが学んできたすばらし  
い]ことを思い続けなさい。(9) あなたがたが学び、信じることによって[心に受  
け入れ]、聞き、また私の歩みの中に見たことを実行しなさい(すなわち、成長  
し、前進し、実を結びなさい)。そうすれば、平和の神があなたがたと共におられ  
る。(ピリピ 4 章 4-9 節)

ある程度までは、私たちの信仰、希望、そして愛が、聖霊の力によってあふれ出るこ  
とは、私たちが霊的に前進し、「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと  
知識において成長する」(第二ペテロ 3 章 18 節)につれて、自然に起こり、また成長し  
ていきます。しかし、すぐ前に引用した箇所できえ、あらゆる点から見てパウロは霊的  
に成熟した模範的な信者たちから成る教会に語りかけているにもかかわらず、それで  
もなお、この点について何度も命令形を用いる必要があると考えています。「喜びなさい！」(4 節、二度)、「主の再臨を心に留めつつ、あなたがたの寛容さを示しなさい！」(5 節)、「祈り続けなさい……そうすれば心の平安を得ることができます！」(6 節)、「これらのことを思い続けなさい！」(8 節)、「これらのことを実行しなさい！」(9 節)という命令です。もし正しい霊的な心構えを身につける過程が完全に自動的であり、あるいは完全に第二の天性となるものであるなら、これほど多くの命令はおそらく必要なかったでしょう。実際には、「思いの腰に帯を締めなさい」という同様の命令を実行するためには、霊的成長と、それが良い習慣になるまでの訓練、さらに必要になるたびに繰り返し自らそれを実践し直す粘り強さが必要です。そして、そのようなことは少なくとも毎日必要になります。このためペテロは、心と思いにおいて霊的に目を覚まし、その状態を保ち続ける必要性を強く強調しているのです。なぜなら、それは少なからぬ葛藤を伴うからです。肉は本来、どのような霊的観点であっても自分に押し付けられることに抵抗します。一方、この世とその支配者である悪魔は、数々の甘い誘惑によって、私たちを肉的な考え方へ引き戻そうと絶えず狙っています。しかし幸いなことに、私たち信者には皆、この思いを支配しようとする戦いにおいて、味方である聖霊がおられるのです。

(5) 肉に従う者は肉のことを思い、御霊に従う者は御霊のことを思う。(6) 肉の思いは死をもたらすが、御霊の思いは、いのちと平安をもたらす。(7) 肉の思いは神に敵対する。それは神の律法に従わず、また従うこともできないからである。(8) このように、肉に支配されている者たち(すなわち、罪の性質の奴隷となっている不信者たち)は、神を喜ばせることができない。(9) しかし、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉に支配されているのではなく、御霊に支配されている。もしだれかがキリストの御霊を持っていないなら、その人はキリストのものではない。(ローマ 8 章 5-9 節)

(16) そこで私は言う。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を決して満たすことはない。(17) 肉の欲することは御霊に逆らい、御霊は肉の欲することに逆らう。この二つは互いに真っ向から対立しているので、あなたがたは自分の望むことを行うことができない。(18) しかし、もし御霊に導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいない。(19) 肉の行いは明らかである。すなわち、淫らな行い、汚れ、放縦、(20) 偶像礼拝、魔術、憎しみ、争い、ねたみ、激しい怒り、利己心、分裂、分派、(21) 妬み、泥酔、酒宴、**またそのような類のもの**である。以前にも言ったように、今もあらかじめ警告しておく。このようなことを行い続ける者たちは、神の御国を受け継ぐことはない。(22) しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、忍耐、親切、善良、信仰、(23) 柔和、自制である。このようなものを禁じる律法はない。(24) キリスト・イエスに属する者たちは、その肉を、その弱さと欲望もろとも十字架につけたのである。(25) もし私たちが御霊によって生きているのなら、御霊によって歩もうではないか。(ガラテヤ 5 章 16-25 節)

心と思いに「帯を締めている」とは、どのような事態が起ころうとも対処できるよう、訓練と備えの両方によって準備が整っていることを意味します。私たちが肉体的な意味で一日に備えるのと同じように、ペテロは、霊的な意味でも備えを整えなければならぬと教えています。その備えには、事前の備えと、その時々々の備えとの両方があります。たとえば、仕事に出かける朝、その日に着る服を身に着けるためには、あらかじめ適切なスーツを買い、必要に応じてクリーニングに出し、靴を磨き、洗濯を済ませておくなどの準備をしていなければなりません。同じように、試練や苦難が襲ってきたその時になって、この霊的な命令を果たそうとしても、それ以前に神の真理を熱心に学び、その真理を信じることによって成長し、その試練に立ち向かうために必要な霊的な内なる強さを養っていなければ、それを果たすことはできません。また、どれほど立派な衣服が衣装棚いっぱいにそろっていたとしても、仕事の日には実際にそれを身に着なければならぬのと同じように、この命令を実践するためには、私たちが日々、そして一瞬一瞬、心に蓄えた真理を実際に適用しなければなりません。クリスチャンである私たちは、いつでも「戦いのために帯を締める」備えができていなければなりません。なぜなら、私たちの敵である悪魔は常に歩き回り、備えが不十分な者を探しているからです。その備え不足が慢性的なものであれ、あるいはほんの一瞬だけ気を緩めているところを見つげられたのであれ、悪魔はその機会を逃しません。私たちが置かれているこの霊的な戦い——そして主が再び来られるその時まで、一日一日の一瞬一瞬続くこの戦い——では、悪い者とその手下たちが攻撃を仕掛けてくるたびに、私たちはいつでも直ちに「帯を締める」備えができていなければなりません。この命令を果たすことは、きわめて重要です。ヘブル 11 章が教えているように、私たちはおびたしい数の

証人たちに見守られています。それだけでなく、先の節([第一ペテロ 1 章 12 節](#))で見たように御使いたちも私たちを見えています。そして何よりも、私たちの愛する主イエスをご覧になっています。どのような戦場でもそうであるように、戦いに勝利すれば士気は高まります。しかし敗北は、どれほど勇敢で、どれほどよく訓練された兵士であっても、その心をくじくものです。では、この戦いのために「帯を締める」とは、具体的にどのようにすればよいのでしょうか。

この問いに対する答えは二つあります。第一に、戦場にいる軍隊が時間の許すたびに補給を行わなければならないのと同じように、この人生の苦難に十分備えるためには、信者もまた、あらゆる機会を用いて神の御言葉を学び、信じ、それを適用しなければなりません。聖書の真理こそ、この戦いを戦い抜くために必要な弾薬だからです。したがって、「どのようにして備えるのか」という問いに対する第一の答えは、機会があるたびに、信頼できる堅実で正統的な教えに基づく良い教師から真理を聞き、学び、信じ続けることです。第二に、信者が「基礎訓練」の段階を超えるだけの真理を学ぶと、主は必ず、その人が学び信じたことを実践する機会を人生の中で与えられます。私たちのクリスチャン生活では、たとえ大きな試練が毎日起こるわけではないとしても、この世を歩む中で直面する事柄に真理を適用する機会がまったくない日は、おそらく一日もないと言ってよいでしょう。このような試練は、小さなものであっても、単に「帯を持っていること」(すなわち、多くの真理を学び、それを信じていること)と、実際に「帯を締めること」(すなわち、真理を適用する備えができており、それを実際に効果的に実践すること)との違いを、実にはっきりと示します。不意を突かれた場合であれ、十分備えた状態で攻撃を受けた場合であれ、信者は、予期しない圧力に直面した時にはいつでも、自分が学び、信じてきた真理を集め、それによって自らの霊的立場を守る術を身につけなければなりません。

(1) こういうわけで、あなたがたはキリストと共によみがえらせられた[者]なのだから、上にあるものを求め続けなさい。そこにはキリストがおられ、神の右に座しておられる。(2) 地上のものではなく、上にあるものを思い続けなさい。  
([コロサイ 3 章 1-2 節](#))

この引用からも明らかなように、神の観点を保ち続けるためには、ある程度の努力が必要です。もし私たちが、天のすばらしさや、私たちの主の栄光、そして神がその比類ない愛によって、私たちのためにしてくださったこと、今してくださっていること、これからしてくださることを、自然に思い続けることができるのであれば、パウロがここで、そのようにしなさいと命じる必要はなかったでしょう。簡単に言えば、私たちが個人的な聖書の通読や体系的な学びを通して御言葉から学んだすばらしい教理や真理を心に保

ち続けるためには、それらを最初に学び、信じるだけでは十分ではありません。毎日この世を歩む中で、それらの真理を意識して、しかも揺るぎない決意をもって繰り返し思い起こし、それについて黙想し続けるという、一貫した努力と注意深さが必要です。そうすることによって初めて、私たちはどのような危機に直面しても、「真理の剣」([エペソ 6章 17節](#))を手にして立ち向かう備えができるのです。

聖書は、私たちがそうすべきであることは教えていますが、それを具体的にどのように行うべきかまでは示していません。そのような事柄は(当然のことながら、また幸いなことに)、真理をそれぞれが自分自身の生活にどのように適用するか委ねられています。しかし、一つだけ確かなことがあります。それは、私たちが知り、愛しているすべての真理は主イエス・キリストにおいて完全に表されており、このことに関する私たちのあらゆる努力の中心は、このお方ご自身でなければならないということです。

(14) このために、私は父の前にひざをかがめる。(15) 天にあるものも地にあるものも、その家族全体は父からその名を与えられている。(16) どうか父が、その栄光の豊かさに従って、御霊により、あなたがたの内なる人を力強く強めてくださるように。(17) また、あなたがたが愛に根ざし、愛に土台を据えられ、信仰によってキリストがあなたがたの心に住んでくださるように。(18) そして、すべての聖徒たちと共に、[あなたがたに対する主の愛の]広さ、長さ、深さ、高さがどれほどであるかを理解する力を与えられ、(19) [すなわち、]あらゆる[人間の]理解をはるかに超えるキリストの愛を知ることができるように。そして、神のあらゆる「満ち満ちた豊かさ」をもって、あなたがたが[あふれるほど]満たされるように。(エペソ 3章 14-19節)

私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。(ピリピ 1章 21節)

[モーセは、]目に見えないお方(すなわち、目には見えない主イエス・キリストを心の目で見続けることによって)を見ているかのように、強くあり続けた。(ヘブル 11章 27節後半)

重要な聖句や詩篇を覚え、それらを繰り返し思い起こすこと、機会あるごとに聖書を何度も読み返すこと、受肉された神の御言葉である主と、主が体現しておられる真理について思い巡らすこと、そして、絶えず祈るというすばらしい特権を通して、私たちがこれほど愛しているお方との絶え間ない対話を保つこと——これらはすべて、以上に述べたことを実践し、私たちの思いや感情に「帯を締め」、主に仕える備えを整えるた

めのすばらしい方法です。さらに、「帯を締めて」霊的な戦いに備えるというこの命令に特に関係する事柄について、自分自身のために「覚えておくべき良いこと」の一覧を作っておくことにも、確かに価値があります。というのも、霊的な戦いはしばしば思いがけず私たちに襲いかかってくるからです。たとえば、主が他の人々のためになされたこと（たとえば、紅海でイスラエルの民を救い出されたこと。[ヨシュア 24 章 6 節](#)；[ネヘミヤ 9 章 9 節](#)；[詩篇 106 篇 9 節](#), [136 篇 13 節](#)；[使徒行伝 7 章 36 節](#)；[ヘブル 11 章 29 節](#)参照）を思い起こし、それと同時に、主が私たち自身の人生や、私たちの愛する人々の人生において行ってくださった数々の偉大な救いを思い起こすことが挙げられます。また、苦難の時に聖霊がいつも与えてくださる励まし（[第二コリント 1 章 3-7 節](#)）を経験する時、その励ましのために聖霊が用いてくださった聖書箇所、聖句、実例、そして真理をしっかり心に留めておくことも大いに有益です。そうすれば、将来、悪い者から突然の衝撃や不意の攻撃を受けた時（それは必ず起こります）、それらを用いて戦いの中にある自分の感情を支えることができます。以下の一覧は、決して絶対的なものでも、完全なものでもありません。しかし、ここに挙げる事柄は、この著者にとって助けとなってきたように、読者にとっても、苦しみや緊張の時に役立つものとなるかもしれません。覚えておいてください。主イエスは、私たちの手を握ってくださいます（[ヨハネ 10 章 28-29 節](#)；[申命記 33 章 27 節](#)参照）。

(23) それでも私は絶えずあなたと共にいる。あなたは私の右の手を取ってください。(24) あなたは御助言をもって私を導き、その後、栄光のうちに私を受け入れてください。（[詩篇 73 篇 23-24 節](#)／NIV 訳）

覚えていてください。主イエスは、嵐の中にあっても私たちと共にいてくださいます（[詩篇 107 篇 29 節](#)；[箴言 10 章 25 節](#)）。

(24) すると突然、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのみ込まれそうになった。しかし、イエスは眠っておられた。(25) 弟子たちはイエスのもとに来て起こし、「主よ、助けてください。私たちはおぼれてしまいます」と言った。(26) イエスは彼らに言われた。「信仰の薄い者たちよ、なぜそんなに恐れるのか。」それから立ち上がって風と波をお叱りになると、あたりはすっかり静かになった。（[マタイ 8 章 24-26 節](#)／NIV 訳）

覚えていてください。主イエスは、荒れ狂う海を渡る私たちを導いてくださいます（[詩篇 66 篇 12 節](#)）。

(26) 弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、おびえ、「幽霊

だ」と言って恐怖のあまり叫んだ。(27) しかし、イエスはすぐに彼らに語りかけられた。「勇気を出しなさい。わたしだ。恐れることはない。」(28) するとペテロは答えた。「主よ、もしあなたでしたら、水の上を歩いてあなたのところへ行くよう、私に命じてください。」(29) イエスは言われた。「来なさい。」そこでペテロは舟から降り、水の上を歩いてイエスのほうへ向かった。(30) しかし、風を見て恐ろしくなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。(31) するとイエスはすぐに手を伸ばして彼をつかみ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。(マタイ 14 章 26-31 節／NIV 訳)

覚えていてください。神はすべての出来事を私たちの絶対的な益となるように定められておられ、私たちの主イエスは、そのすべてを実現しておられます(ローマ 8 章 29-31 節; エペソ 1 章 7-14 節)。

私たちは知っている。神を愛する者たち、すなわち神のご計画に従って召された者たちのためには、神はすべてのことを共に働かせて益としてくださる。(ローマ 8 章 28 節)

覚えていてください。主イエスは、私たちが目に見えるものではなく真理を信じる時、喜んでくださいます(第二コリント 4 章 18 節, 5 章 7 節)。

(1) さて、信仰とは、私たちが望んでいる事柄を確かなものとするもの、また、目に見えない事柄の証拠である。[その信仰とは、生ける御言葉であり、また書かれた御言葉でもあるお方への信仰である。](2) 昔の信者たちは、この[まさにこの]信仰によって神の承認を受けた。(ヘブル 11 章 1-2 節)

覚えていてください。主イエスは、あらゆることにおいて私たちの益となるよう神のみこころを実現しておられます。それゆえ、思いがけないことが起こっても、あるいは心を乱されても、私たちは喜ぶことができます。

(16) いつも喜んでいなさい。(17) 絶えず祈りなさい。(18) すべてのことについて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。(第一テサロニケ 5 章 16-18 節／NIV 訳)

主にあっていつも喜びなさい。もう一度言う。喜びなさい。(ピリピ 4 章 4 節／NIV 訳)

(2) 兄弟たちよ、さまざまな試練に遭う時は、それをこの上ない喜びと思いなさい。(3) あなたがたは、自分たちの信仰が試されることによって忍耐が生み出されることを知っているからである。(4) その忍耐を十分に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは何一つ欠けたところのない、十分に成熟した者となり、満ちあふれる報いを受けるにふさわしい者となる。(ヤコブ 1 章 2-4 節)

覚えていてください。私たちの心は、主イエスと交わる神殿です。ですから、それはきよく保たれ、あらゆる汚れた侵入から守られるにふさわしい場所なのです(エレミヤ 17 章 9 節参照)。

イエスは答えられた。「だれでもわたしを愛するなら、わたしのことばを守る。そうすれば、わたしの父はその人を愛される。そして、わたしたちはその人のところに来て、その人のもとに住む。」(ヨハネ 14 章 23 節/NIV 訳)

覚えていてください。主イエスは、私たちのごくわずかな信仰であっても喜んでくださいます。小さな種が大きな木へと成長するように、小さな信仰も大きく成長し、また、からし種ほどの小さな信仰でさえ山を動かすことができます(マタイ 13 章 31-32 節)。

「まことにあなたがたに言う。もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この山に『ここからあそこへ移れ』と言えば移る。あなたがたにできないことは何一つない。」(マタイ 17 章 20 節後半/NIV 訳)

覚えていてください。私たちは弱くても、主イエスは強いお方です。そして、私たちが自分自身ではなく主に拠り頼むとき、主は私たちの弱さを最大の強さへと変えてくださいます(第二コリント 11 章 30 節; ヘブル 11 章 34 節)。

しかし主は私に言われた。「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さの中で完全に現れるからである。」それゆえ私は、キリストの力が私の上に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇ろう。(第二コリント 12 章 9 節/NIV 訳)

覚えていてください。たとえ私たちが死の陰の谷を歩むことがあっても、主イエスは私たちと共にいてくださり、やがてその闇を、私たちが待ち望む光へと変えてくださいます。

たとえ死の陰の谷を歩むことがあっても、私はわざわざを恐れない。あなたが私と共におられるからである。あなたのむちとあなたの杖、それが私を慰める。(詩篇 23 篇 4 節 / NKJV 訳)

しかし私は、あなたがたに新しい戒めを書き送る。その真実は、キリストにおいても、あなたがたにおいても現れている。なぜなら、闇は過ぎ去りつつあり、まことの光がすでに輝いているからである。(第一ヨハネ 2 章 8 節 / NIV 訳)

覚えていてください。主イエスは私たちの味方であって、私たちに敵対するお方ではありません。ですから、私たちに向けられる攻撃は主から来るのではなく、悪い者から来るのであり、主は私たちを守ってくださいます。

もしだれかがあなたを攻撃しても、それはわたしによるものではない。あなたを攻撃する者は、あなたの前に倒れる。(イザヤ 54 章 15 節 / NIV 訳)

そして、私たちを[耐えられない]試みに遭わせないで、悪い者から救い出してください。(マタイ 6 章 13 節)

私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、[天使的な]支配者たちに対し、[天使的な]権威たちに対し、この[現在の]暗闇の世界の支配者たちに対し、天上にいる悪の霊どもに対するものなのである。(エペソ 6 章 12 節)

覚えていてください。主イエスこそ私たちが牧してくださるお方です。たとえ死の陰の谷を通ることがあっても、主はどのような時にも私たちが養い、安全に守ってくださいます(ヨハネ 10 章 11-16 節)。

主は私を牧してくださるお方である。だから私は[必要なものに]欠けることはない。(詩篇 23 篇 1 節)

覚えていてください。この戦いを指揮しておられるのは主イエスです。この戦いの中心は私たちではなく主ご自身です。ですから、どのような状況であっても、私たちは主の救いに信頼することができます。

「今日ここに集まっているすべての者は、主が剣や槍によって救われるのではないことを知るようになる。この戦いは主のものであり、主はあなたがたを私たちの手に渡されるからである。」(第一サムエル 17 章 47 節 / NIV 訳)

強く、雄々しくあれ。彼らを恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主ご自身があなたと共に行かれるからである。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てることもない。(申命記 31 章 6 節 / NASB 訳)

このほかにも語るべきことは数多くあります。それこそ、聖書全体を引用し、それを完全に説明し、正しく理解するほどの内容があると言ってもよいでしょう。しかし、最も大切なことは、神がすべてを完全に支配しておられること、そして、イエス・キリストに属する私たちには何一つ恐れる必要がないということです。すべてはイエス・キリストにかかっています。このお方のうちには、「知恵と知識とのすべての宝」が隠されているのです(コロサイ 2 章 3 節 / NASB 訳)。

**霊的な警戒心:** 「霊的に成熟した警戒心をもって」と訳した句は、ここで状況を表す用法で用いられているギリシヤ語の分詞(動詞 nepho[ネーポー: νηφω]に由来)に基づいています。つまり、「警戒していること」が、ペテロが第一章十三節で述べている「思いの腰に帯を締める」という行為を特徴づけ、そのあり方を定める状況なのです。ペテロはこの二つの考えを組み合わせることによって、「帯を締めること」、すなわち霊的戦いに備えることは、共時的(その都度その場で行う)課題であると同時に、通時的(日々積み重ねて行う)課題でもあることを明らかにしています。言い換えれば、私たちは、その時々霊的な姿勢を整えられるよう備えていなければならないだけでなく、日々の霊的成長を通して前もって自分自身を備えておき、やがて訪れる試練に立ち向かえる状態になっていなければならないのです。多くの翻訳は、この分詞を英語の sober(たとえば KJV 訳「身を慎みなさい(be sober)」、ESV 訳「慎み深い思いでいなさい(being sober-minded)」)という語で訳していますが、この分詞が加えられていることによって、私たちは常に霊的に目を覚まし、警戒していなければならないことが明らかになります。もし私たちがそのように警戒し、しかも主にあつて成長することによって霊的戦いの訓練をすでに積んでいるなら、突然圧力や試練が襲ってきた時にも、自分の思いに「帯を締め」、霊的戦いに備えることができる可能性ははるかに高くなります。もちろん、nepho(ネーポー)を「節制している」「慎み深い」と訳すことも誤りではありません。しかし、この動詞は文字どおりには「酒に酔っていない」という意味を持つだけでなく、「目を覚ましている」「警戒している」という、より広い意味も持っています。そして、アルコールが多くのクリスチャンにとって問題となり得ることは確かですが、悪い者の策略や罠に対して警戒を怠る原因は、それだけではなく、通常はそれが最も重大な妨げであるわけでもないことは明らかです。

どのような分野であっても、常に 100%警戒を保ち続けることは非常に困難です。た

とえ兵士が見張りの任務中に眠らず持ち場を守っていたとしても、敵が自分の陣地へ忍び寄ってくることに気づけるほど十分な警戒心を保ち続けられるとは限りません。クリスチャンの場合、この状況はさらに難しく、しかもそれだけ重要です。私たちは、ある霊的な戦いに勝利したことや、あるいは何らかの霊的真理を学び、それを深く味わったことによって、大きな平安と喜びのうちに主と非常に近く歩んでいることがあります。ところが、その後で再び、ある程度この世的な考え方へと戻ってしまうことも珍しくありません。それ自体が必ずしも罪であるとは限りません。しかし、私たちには罪の性質があり、この世の騒がしきやさまざまな誘惑に取り囲まれ、さらに人生の複雑な問題や多くの事柄が私たちの注意を奪おうとしていることを考えるなら、たとえ霊的に成熟し、霊的前進が順調である時でさえ、私たちの心が——ほんのしばらくの間であっても——心の奥底では最も大切だと知っている真理から気をそらされてしまうことは、決して珍しいことではありません。問題は、見張りの任務におけるほんの一瞬の気の緩みでさえ、不意の激しい攻撃に対して無防備になる結果を招きかねないということです。そして、悪魔はそのような不意打ちの名人なのです。

身を慎み (nepho [ネーポー: νῆφω]), 目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔は、ほえたける獅子のように歩き回り、だれか食い尽くす者はいないかと探している。(第一ペテロ 5 章 8 節 / NKJV 訳)

真理を学び、それを信じ、絶えず実践することによって、戦いへの備えを習慣としている成熟した信者は、たとえ一時的に警戒を緩めてしまったとしても、深刻な打撃を受ける可能性は比較的小さいと言えます。最も霊的に成熟した信者であっても完全ではありません。ですから、本研究の前の部分で取り上げた方法——さらに、問題が起こった時に真理へ立ち返り、自分の感情を立て直すために、私たち一人ひとりが身につけていく「戦術」——は、不意を突かれた時には必要不可欠です。しかし、主と親しく歩んでいる人であれば、その立て直しはより容易であり、しかもより「自然に身についたこと」として行えるでしょう。一方、真理を学ぶことにおいても、学んだ後にそれを黙想することにおいても断続的な人は、人生のさまざまな圧力を霊的により大きな問題として経験することになります。そして、霊的にさまよっている人は、「ほえたける獅子」が行く先々で自分をつけ狙っていることに気づくでしょう。

(18) また、ぶどう酒に酔ってはいけない。それは身を持ち崩すものである。むしろ、聖霊によって満たされ続けなさい(すなわち、聖霊によって霊的成長を続けなさい。聖霊は、身を持ち崩すこととは対照的に、霊的成長をもたらす手段である)。(19) 詩篇と賛美と霊の歌をもって、自分自身に[励ましを]語りかけ、心から主に向かって歌い、賛美しなさい。(20) そして、すべてのことについて、私たち

の主イエスの御名によって、父なる神にいつも感謝しなさい。(エペソ 5 章 18-20 節)

(15) また、キリストから来る平和を、あなたがたの心において[何を、またどのように考えるべきかを判断する]審判役としなさい。この平和へと、あなたがたは一つのからだにあって召されたのである。そして、感謝する者となりなさい。

(16) 主の御言葉を、豊かにあなたがたのうちに住ませなさい。あらゆる知恵をもって、自分自身を[一人ひとり]教え、戒め、詩篇と賛美と霊の歌をもって、心から神に向かって歌いなさい。(17) そして、あなたがたのすることは、ことばによることであれ、行いによることであれ、すべて主イエスの御名によって行い、主を通して父なる神に感謝しなさい。(コロサイ 3 章 15-17 節)

このように、「霊的に成熟した警戒心をもって、あなたの思いの腰に帯を締める」ことができるようになるためには、前もって霊的な訓練を積んでいること、襲ってくる霊的な圧力に対して自らを整える備えができていること、そして、私たちの指揮官であるイエス・キリストのためにシオンへの高い道を前進していく中で、「神の武具のすべて」を実際に身に着け、それを着け続けることが必要です。

キリスト・イエスの良い兵士として、私と苦しみを共にしなさい。兵役に就いている者はだれも、日常生活の事柄に巻き込まれたりほしくない。[それらを避けるのは、]自分を召した方を喜ばせるためである。(第二テモテ 2 章 3-4 節)

(11) 悪魔の策略に立ち向かうことができるように、神の武具のすべてを身に着けなさい。(12) 私たちの戦いは、血肉に対するものではなく、支配者たち、権威たち、この暗闇の世界の支配者たち、そして天上にいる悪の霊どもに対するものである。(13) それゆえ、神の武具のすべてを身に着けなさい。そうすれば、悪の日が来た時にも耐え抜き、すべてを成し遂げた後も、なお堅く立つことができる。(14) だから、しっかりと立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には義の胸当てを着け、(15) 足には平和の福音から来る備えを履きなさい。(16) これらすべてに加えて、信仰の盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢をすべて消すことができる。(17) また、救いのかぶとと、神のことばである御霊の剣を取りなさい。(エペソ 6 章 11-17 節/NIV 訳)

信仰の良い戦いを戦いなさい。(第一テモテ 6 章 12 節前半)

わが子テモテよ。私は、以前あなたについて語られた預言に従って、この命令

をあなたに託す。それは、あなたがそれらに従って良い[霊的な]戦いを戦うためである。(第一テモテ 1 章 18 節)

私は良い戦いを戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通した。  
(第二テモテ 4 章 7 節)

**来たるべき恵みに望みを置きなさい：**「イエス・キリストの出現」とは、主が栄光のうちにこの世へ戻り、ご自分の王冠を受け、再臨において御国を建てられることを指しています。来たるべきその栄光の日に、私たち信者は、この地上でまだ生きている者であれ、天において主の御前でその偉大な日を待っている者であれ、皆一人残らず復活します。その時、「キリストにある死者」がまずよみがえり、次に「生き残っている私たち」が肉体の死を経ることなく変えられ、復活の体で「空中で主と会う」ために引き上げられるのです(第一テサロニケ 4 章 15-17 節)。これこそ、すべてのクリスチャンが目指すべき、また常に待ち望むべき「祝福された望み」です。

[私たちは]祝福された望み、すなわち、私たちの偉大な神であり救い主であるイエス・キリストの栄光の現れを待ち望んでいる(すなわち、主が現れられる時、私たちも栄光のうちに復活するのである)。(テトス 2 章 13 節)

イエス・キリストにある新しく生まれた信者として、私たちは皆、「神の多種多様な恵み」を受けている者です(第一ペテロ 4 章 10 節)。キリストの「満ち満ちた豊かさ」から、私たちは皆、「恵みの上にさらに恵み」を受けたからです(ヨハネ 1 章 16 節)。恵みとは神の好意です。そして、私たちの罪のために愛する御子が犠牲となられたことによって、死が永遠のいのちへと変えられること以上に大きな神の好意が、いったい考えられるでしょうか。十字架こそ「恵み」であり、私たちが信じた後に神から受けるすべての好意の始まりです。この今の世において、私たちにはなお「苦難」があります(ヨハネ 16 章 33 節)。しかし、来たるべきいのちにおいては、罪もなく、死もなく、悪もありません。そして、キリストの教会の一員である私たちのものとなる、来たるその偉大な日に注がれる恵みは、今の私たちには本当には想像もできないほど豊かなものですが、それを妨げるものは何もないのです。

しかし、こう書かれている。「目が見たこともなく、耳が聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともないものを、神はご自分を愛する者たちのために備えてくださった。」(第一コリント 2 章 9 節)

では、私たちはどのようにして「来たるべき祝福に望みを置く」のでしょうか。簡潔に

言えば、まず、これから先に待ち受けている栄光について、聖書が教えていることをできる限り学ぶことです。すなわち、復活についての教え、永遠の報いについて聖書が語っていることのすべて、そして新しいエルサレムにおいて私たちが受け継ぐ相続財産について聖書が教えていることのすべてを学ぶことです。<sup>4</sup> しかし、それらの真理を学び、信じるだけでは十分ではありません。私たちは、それらの真理を日々の生活の中で実際に適用できるよう備えていなければならないのです。そして実際、天において「朽ちることのない体」が私たちが待っていること([第二コリント 5 章 1 節](#))、また、「虫もさびも損なうことがなく、盗人も押し入って盗むことのない」([マタイ 6 章 20 節](#) / NASB 訳) 天に永遠の報いが蓄えられていることを思い起こすことは、この東の間の人生で肉体的な苦しみや物質的な乏しさを経験している時、私たちに非常に大きな励ましを与えます。というのも、この報いと復活への希望こそ、すべてのクリスチャンの信仰が向けられるべき正当で不可欠な焦点であり、私たちすべてが関わっている霊的戦いにおいて勝利するために身につけなければならない「戦場における思考」の中で実践される信仰の中心だからです。

信仰がなければ、[神に]喜ばれることは不可能である。神に近づこうとする者は、神がおられることと、ご自分を熱心に求める者たちに報いてくださる方であることを信じなければならない。(ヘブル 11 章 6 節)

(3) 私たちの主イエス・キリストの神また父がほめたたえられますように。神は、その豊かなあわれみによって、イエス・キリストの死人の中からの復活を通して、私たちを生ける望みへと新たに生まれさせ、(4) また、朽ちることも、汚されることも、色あせることもない相続財産へと導いてくださいました。その相続財産は、私たちのために天に蓄えられ、守られています。(第一ペテロ 1 章 3-4 節)

言い換えれば、私たちの主が再び来られる時にもたらされる栄光に望みを置くことは、「霊的な警戒心をもって思いの腰に帯を締める」ことの一例なのです。永遠の明日に待っている祝福に心に向けることは、前進し続けるすべてのクリスチャンが、「今日という日がある間」([ヘブル 3 章 13 節](#); [詩篇 118 篇 24 節](#)参照)の「今日」を生き抜くために欠かせない要素です。というのも、悪い者は、横道にそれている信者や後退している信者にはほとんど、あるいはごくわずかしか関心を示さないかもしれませんが、本当に霊的に前進する者には必ず激しい反対を仕掛けてくるからです。神は、私たちに必要な真理(実に聖書全体)を与え、必要な力(内住してくださる聖霊なる神)を与え、

---

<sup>4</sup> これらの事柄については、Ichthys の他の箇所でも取り上げていますが、とりわけ『[来たる艱難期 第 6 部: 千年王国と新しいエルサレム](#)』をご参照ください。

そして必要な方法(御霊によってそれらの真理を適用するために、思いに「帯を締める」という霊的な備え)をも与えてくださいました。あとは、私たちがこれらの祝福された備えを、イエス・キリストのために実際に用いるだけなのです。

---

[続く:ペテロ・シリーズ#30「時の中における聖化—霊的戦いにおけるクリスチャンの  
防御—第一ペテロ 1 章 14-16 節」]